

東南アジアにおける生薬の比較研究

(第Ⅲ報)

—— シンガポールの中薬 (3)[†] ——

小島 一郎* ・多田 一郎**

吉田 集而*** ・新田 あや***

A Comparative Study of Crude Drugs in Southeast Asia, Part III

—— Chinese Crude Drugs in Singapore (3) ——

by

Ichiro KOJIMA, Ichiro TADA, Shuji YOSHIDA and Aya NITTA

前報にひきつづき、まずシンガポールののこりの中薬の基原について述べ、続いてシンガポールの中薬の特徴などを検討する。

前報までに、すでに525品目について、その基原を検討した。本稿では、隠花植物および植物性加工品などのその他類生薬27点、動物類生薬50点、鉱物類生薬19点の合計95品目について述べる。

鉱物類生薬については、多田、吉田が、動物類生薬については小島が、その他類生薬および全体にわたっての検討は新田が、それぞれ分担し、その基原について考察した。

鉱物類生薬は、その形態、性状およびX線解析によって同定した。主成分に関しては、非結晶物および鉄を含んだもの以外は、X線解析で推定、確認してある。この鉱物類生薬には、なお問題をのこしているので、多田が他の市場品を加えて詳細に検討し、別稿で報告する予定である。

また、動物類生薬は、植物あるいは鉱物のそれとは異なった、困難な問題がある。すなわち、その基原を推定するに必要な部分を欠いているものが多く、たとえば、恐らくはゴキブリ類の

* 滋賀県立短期大学農学部

** 大阪税関輸入部

*** 京都大学薬学部 生薬学教室

† 「シンガポールの中薬 (2)」『東南アジア研究』(1972) Vol. 10, No. 1, pp. 105~120.

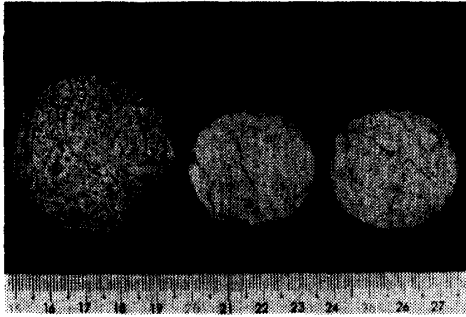
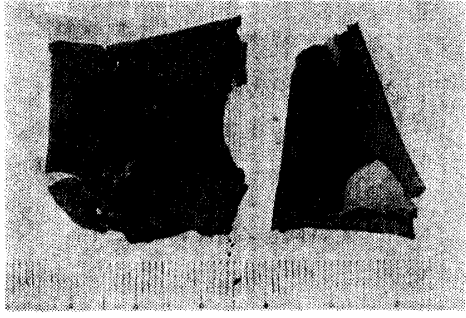

糞であろう遊虫珠とか、角のうすくけずられた正羚羊では、とうてい正確な同定はできなかつた。一方、その基原を推定するにあたり、文献として用いた薬材学や中薬志では、一種のみを基原とするものはむしろすくなく、多くは同属異種の数種とか、その近縁属を広く含んだものである。そこで、ほぼ誤りのないものは、その基原を記載したが、疑わしいものはすべて不明の項に入れた。そのため、動物類生薬に関しては、本稿で十分に意をつくしているとはいいたい。また、動物類生薬は、植物や鉱物のそれとはことなつた次元の問題も含んでいるようである。そこで、動物類生薬については、小島が他の市場品も含めて、比較検討し、改めて、別稿で報告する予定である。

なお、本稿の記載法は、第I報*で述べたごとくである。

その他類生薬

No	生薬名	基原	備考
S 442	昆布	<i>Laminaria japonica</i> Areschong* [Laminariaceae]	
S 443	海带	<i>Laminaria saccharian</i> Lam. [//]	G. B. 和漢薬名彙によれば <i>Eisenia bicyclis</i> Setchell (アラメ)
S 444	海藻	<i>Sargassum tortile</i> C. Agardh.* [Sargassaceae]	
S 445	金蟬花	<i>Cordyceps scoptianus</i> Olliff.* [Clavicipitaceae] <i>Cicada flamata</i> Dist. (Cicadae)	蟬の幼虫に菌が寄生したもの、薬材学では蟬花
S 446	冬虫夏草	<i>Cordyceps sinensis</i> (Berkeley) Saccardo* [//]	鱗翅類昆虫の幼虫に菌が寄生したもの
S 612	白木耳†	<i>Tremella fuciformis</i> (Berkeley)* [Tremellaceae]	
S 447	猪苓	<i>Polyporus umbellatus</i> Fries* [Polyporaceae]	
S 448	茯苓	<i>Poria cocos</i> Wolff.* [//]	
S 449	茯苓皮	<i>Poria cocos</i> Wolff.* [//]	
S 450	雷丸	<i>Omphalia lapidescens</i> Schroeter* [//]	
S 465	山树菇†	<i>Trametes sanguinea</i> (Fr.) Lloyd [//]	推定, 原色日本菌類図鑑, G. B. によれば <i>Polystictus sanguineus</i> Fries
S 451	洋虎碧†	Resin fossil* [Pinaceae]	薬材学では琥珀, 樹脂の化石
S 452	天竹玉	<i>Phyllostachys reticulata</i> C. Koch* <i>P. nigra</i> Munro var. <i>henonis</i> Makino* [Gramineae]	薬材学では天竹黄
S 453	鮮血結	<i>Calamus draco</i> Willde.* [Palmae]	薬材学では血竭
S 462	武麦仁	<i>Ulmus macrocarpa</i> Hance* ? [Ulmaceae]	薬材学では蕪荑, 本品は同属異種植物混入?
S 454	没药	<i>Commiphora molmol</i> Engler* <i>C. abyssinica</i> (Berg.) Engler* [Burseraceae]	
S 455	乳香	<i>Pistacia lentisus</i> L.* [Anacardiaceae]	G.B. によれば <i>Boswellia</i> sp. (Burseraceae)

*『東南アジア研究』(1972) Vol. 9. No. 4, p. 598.

No	生薬名	基	原	備	考
S 456	文蛤子	<i>Rhus chinensis</i> Miller* (<i>Schlechtendalia chinensis</i> Bell)	[Anacardiaceae]	薬材学の五倍子にあたる。文蛤子は通常ハマグリを指す、 <i>Schlechtendalia chinensis</i> Bell の寄生により生じた虫えい。	
S 457	文蛤子	〃	[〃]		
S 458	煨干七	<i>Rhus vernicifera</i> DC*	[〃]	薬材学では干漆、煨は加熱の意	
S 459	藤黄†	<i>Garcinia hamburyi</i> Hook. f.*	[Guttiferae]		
S 613	丑魏†	<i>Ferula foetida</i> Regel* <i>F. assa-foetida</i> L.*	[Umbelliferae]	薬材学では阿魏	
S 460	煨芦会	<i>Aloe</i> spp.*	[Liliaceae]	薬材学では蘆薈、煨は加熱の意	
S 461	神曲			薬材学では神麩	
S 464	白茶并			径約3cm, 厚さ3mmの円板状、葉および小枝片混入、灰色、タンニン反応陽性、阿仙薬の代用か？	
					
S 466	白石衣†			形状、大きさ不定、厚さ約0.2mmの薄片、一面は黒色で全面に多数の突起状小点、他面は平滑、付着痕あり。	
					
S 528	鹿肚草			黄土色、径約15~20cm、厚さ15cmの餅状に固めたもの、切口は草本性せんい状、軽い。	
					

* 薬材学による学名

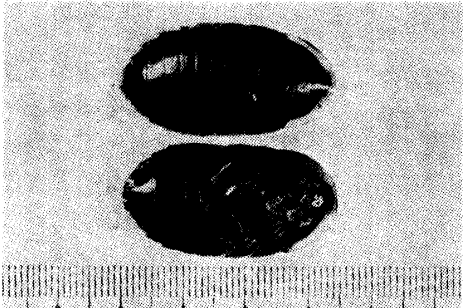
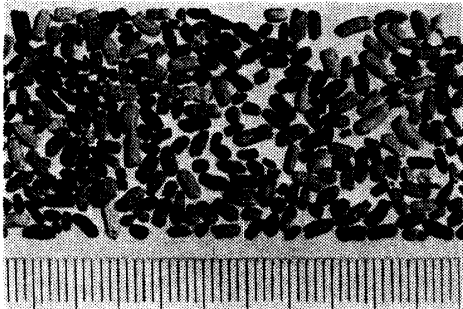
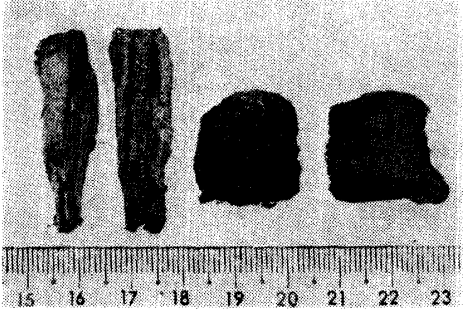
† 稀用

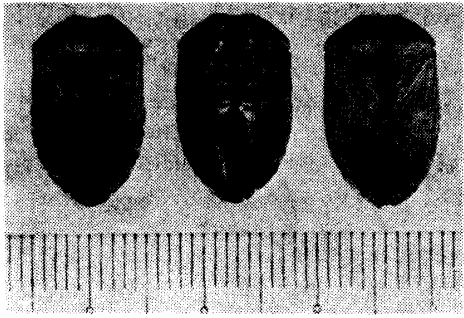
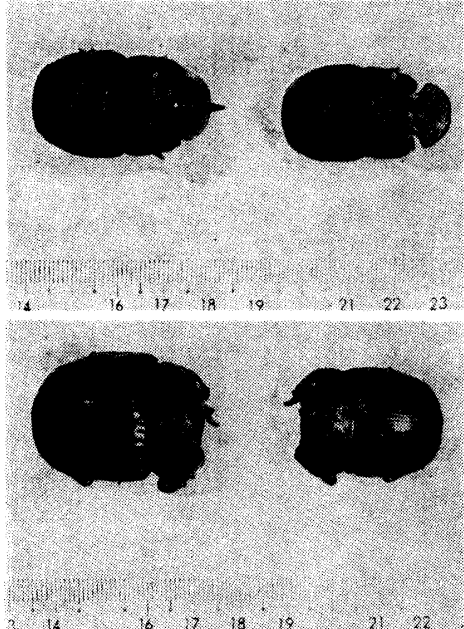
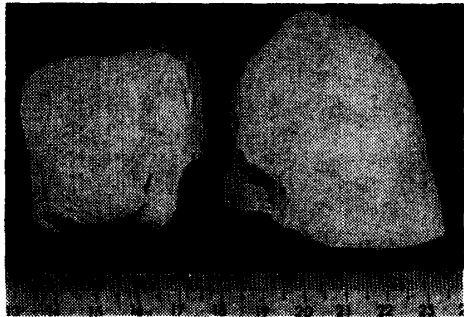

G.B. は Gardens' Bulletin

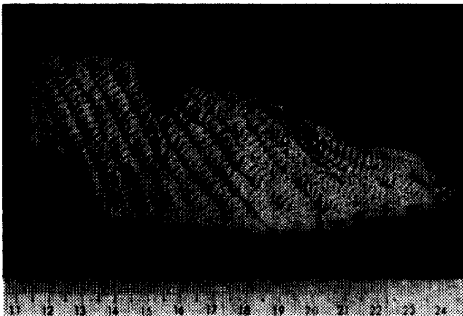

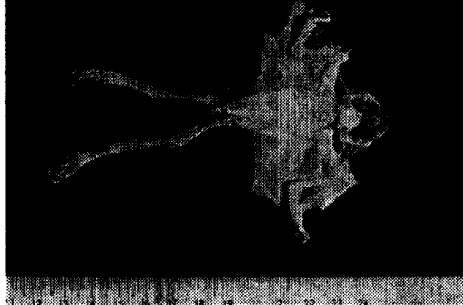
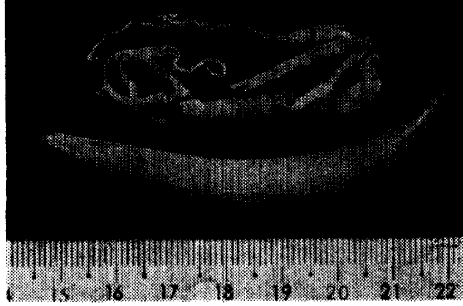
動物類生薬

No	生薬名	基 原	備 考
S 246	紫 霄 花	<i>Spongilla semispongilla</i> Annandale* or <i>Spongilla</i> spp., <i>Ephydatia</i> spp.* [Spongilladae]	虫体
S 618	海 底 栢†	<i>Corallium elatius</i> Ridley* or <i>C. konojoi</i> Kisjimouye* ? [Gorgonidae]	薬材学の珊瑚に類似する, 骨骼
S 485	地 龙 干†	<i>Perichaeta sieboldii</i> Horst.* or <i>Lumbricus terrestris</i> * [Lumbricidae] or <i>Pheretima asiatica</i> Michaelsen* [Megascolecidae]	薬材学では地龙, 虫体
S 486	水 蛭 干†	<i>Hirudo niponica</i> Whitman* [Hirudinidae]	薬材学では水蛭, 虫体
S 487	製 全 虫	<i>Buthus martensii</i> Karsch.* [Scorpionidae]	薬材学では全蝎, 虫体
S 488	蜈 蚣 虫	<i>Scolopendra marsitans</i> L.* [Scolopendridae]	薬材学では蜈蚣, 虫体
S 491	蟬 退	<i>Cryptotympana pustulata</i> Fabricius* ? [Cicadidae]	薬材学では蟬蛻, 幼虫の脱皮殻
S 492	疆 蚕	<i>Batrytis bassiana</i> Bals* [Moniliaceae] <i>Bombyx mori</i> L.* (Bombycidae)	薬材学では疆蚕, <i>Batrytis bassiana</i> Bals が寄生して死んだ虫体
S 493	晚 蚕 砂	<i>Bombyx mori</i> L.* [Bombycidae]	かいこの糞
S 619	白 蚕 衣†	“ ? [“]	かいこのまゆ
S 615	蜂 房†	<i>Polistes mandarinus</i> Saussure* [Vespidae]	巢
S 494	生 牡 利	<i>Ostrea</i> sp. [Ostreae]	薬材学では牡蠣, 貝殻だけで種の鑑定は困難
S 495	生 石 決	<i>Haliotis</i> spp. [Haliotidae]	薬材学では石決明, 貝殻, 2~3 種混入
S 616	珍 珠 母†	<i>Pinctada</i> sp. [Pteriidae]	薬材学では珍珠貝, 貝殻
S 497	海 馬	<i>Hippocampus</i> sp. [Syngnathidae]	魚体, 薬材学に4種記載されている
S 499	白 龙 皮	<i>Elaphe climacophora</i> Schlegel* [Colubridae]	薬材学では龙衣, 脱殻
S 525	製 析 蛇	<i>Agkistrodon acutus</i> Guenther* ? [Crotalidae]	薬材学の蕘蛇に類似する。
S 500	別 甲	<i>Amyda sinensis</i> Wiegmann* [Triocychidae]	薬材学では鼈甲, 腹甲羅, 加熱加工品
S 501	生 别 甲	“ [“]	“ “
S 502	龟 板	<i>Geoclemys reevesii</i> Gray* [Testudinidae]	腹甲羅, 加熱加工品
S 503	生 龟 板	“ [“]	“
S 504	白 丁 香	<i>Passer montanus saturatus</i> Steineger* or <i>Carduelis spinus</i> L.* [Ploceidae] [Fringillidae]	糞
S 505	炒 鸡 内 金	<i>Gallus domesticus</i> Brisson* [Phasianidae]	薬材学では鸡内金, 胃壁内膜, 加熱加工品
S 526	鸡 旦 壳	“ [“]	薬材学では雞蛋壳, 卵殼
S 506	獬 豸 皮 (S 507 と 同じ)	<i>Erinaceus europaeus dealbatus</i> Swinhoe* or <i>E. amurensis amurensis</i> Schrenck* [Erinaceidae]	薬材学では刺猬皮, 体表皮(背)
S 507	獬 豸 皮 (S 506 と 同じ)	“ [“]	“
S 508	穿 山 甲	<i>Manis pentadactyla</i> Sundevall [Manidae]	背甲鱗片, 加熱加工品
S 509	生 山 甲†	“ [“]	薬材学では穿山甲(S 508 と同じ), 背甲鱗片
S 510	五 脂 灵†	<i>Pteripus pselaphon</i> Lay* or <i>P. dasymallus</i> Temmick* [Pteropodidae]	薬材学では五灵脂, 糞

No	生薬名	基 原	備 考
S 511	夜明砂	<i>Vespertilio murinus</i> L.* or [Vespertilionidae] <i>Rhinolophus ferrum-equinum nippon</i> Temminck* [Rhinolophidae]	糞
S 512	望月砂	<i>Lepus cuniculus</i> L.* or [Leporidae] <i>L. europaeus aurigineus</i> Hollister*	〃
S 513	虎 骨	<i>Felis tigris slyani</i> Pocock* [Felidae]	骨, 加熱加工品
S 527	鹿 筋	<i>Cervus nippon nippon</i> Temminck* [Cervidae]	腱あるいは筋肉
S 617	煨鹿角霜	〃 [〃]	角, 加熱加工品
S 515	阿 膠	<i>Equus asinus chinensis</i> * [Equidae]	皮から得たにかわ
S 516	犀 牛 皮	<i>Rhinoceros</i> sp. ? [Rhinocerotidae]	皮
S 517	象皮絲†	<i>Elephas maximus</i> L.* or [Elephantidae] <i>Loxodonta africanus</i> Blumenbach*	薬材学では象牙, 鼻
S 518	象牙片†	〃 [〃]	角
S 519	血 餘	<i>Homo sapiens</i> L.* [Hominidae]	薬材学では血余, 人毛炭化物

No	生薬名	性 状	
S 489	金地別	ゴキブリ類の虫体, 光沢のある黒かっ色こぼん型, 翅はなく, 前頭部に黄白色のふちどりがある。	
S 521	遊虫珠	ゴキブリ類の糞, 径 1~2mm, 長さ 2~5mm の円柱状, 灰黒色~黒色	
S 490	桑螵蛸	カマキリ類の卵, 2種類混入, 薬材学には4属4種が記載されているが, そのいずれか, あるいは記載外の別種の可能性もある。	

No	生薬名	性 状	
S 614	九香虫†	カメムシ類の虫体，葯材学には4属9種，うち2属2種の学名が記載されているが，そのいずれにも一致しない。	
S 522	羊天雷	コガネムシ類の虫体，2種類混入， (A) 黒色で，光沢がなく，雄体は3本角で，長さ 3.5 cm，幅 2.2cm，雌体は1本角で長さ 2.8cm，幅 1.8cm。 (B) 黒色で頭部欠如，胸部背面に点刻があり，腹部背面に光沢および6条の浅い縦溝がある。長さ 3.5~4 cm (頭部なし)，幅 2.5~3cm	
S 496	海蝶蛸	イカ類の甲羅，葯材学に2属5種が記載されているが，甲羅だけで種の鑑定は困難。	
S 520	水仙子	ハエ類のさなぎの脱殻，かっ色，紡錘形で，横縞がある。長さ約 1.5cm，径約 5mm	

No	生薬名	性状	状
S 524	彭魚鰓†	魚類(サメ類?)の鰓, 長さ約 10cm, 幅約 4cm, 厚さ約 1cm にカットしたもので, 幅約 8mm のひだがある。黄色～淡かっ色	
S 498	海龍	タツノオトシゴ類, 薬材学の海龍には一致しない。カットのため全長不明であるが, 15~20cm と思われる。口吻は長く, 約 2cm, 胸部切口は台形, 背部小さく, 腹部大きい。尾部はわずかに曲る。	
S 523	蝦蟇干	カエル類の内臓を除去し, 腹開きして, 広げたまま乾燥したもの。	
S 514	正羚羊	カモシカ類の角, 薬材学には5属6種が記載されているが, 角だけで種の鑑定は困難。	

鉱物類生薬

No	生薬名	名称および主成分	備考
S 529	自然銅	Pyritum* FeS ₂	
S 530	岱者石	Ocherum Rubrum* Fe ₂ O ₃	薬材学では代赭石
S 531	磁石	Magnetium* Fe ₂ O ₃ , FeO	
S 532	無名異	Limonitum* MnO ₂ , Fe ₂ O ₃	
S 533	紫石英	Amethystum* SiO ₂	薬材学では紫水晶, 和漢薬名彙では螢石 (CaF ₂) で, 紫水晶はほとんど見当たらないという。
S 534	秋石丹	Depositum Urinae Praeparatum* CaSO ₄ ·2H ₂ O	薬材学の淡秋石(尿酸カルシュウム)に近い。
S 545	中乳石	Stalactitum* CaCO ₃	薬材学では滴乳石
S 546	鵝管石	// //	
S 544	石蕊花	// // ?	薬材学では花蕊石
S 535	生龍骨	Fossilia Ossis Mastodi* Ca ₅ (PO ₄) ₃ (OH)	薬材学では龙骨
S 536	煨浮海石	Lapis Pumicis*	非結晶性物質
S 620	云母石†	Muscovitum* KAl ₂ (Si ₃ AlO ₁₀)(OH) ₂	
S 537	金蒙石	Phlogopitum* KMg ₃ (Si ₃ AlO ₁₀)(OH) ₂	薬材学では金礫石
S 538	陽起石	Tremolitum* Ca ₂ Mg ₅ (Si ₈ O ₂₂)(OH) ₂	和漢薬名彙では Actinolite Ca(Mg, Fe) ₃ Si ₄ O ₁₂
S 539	活石	Talcum* Mg ₃ (Si ₂ O ₅) ₂ (OH) ₂	薬材学では滑石
S 540	赤石脂	Bolus Rubra* SiO ₂	
S 541	伏龙肝	Terra Flava Usta* SiO ₂	かまどの土
S 542	生石膏	Gypsum Fibrosum* CaSO ₄ ·2H ₂ O	
S 543	寒水石	Calcitum* CaCO ₃	

本稿で、シンガポールで収集した中薬 621 点のすべてをいちおう報告し終えた。そこで、今後の予測をつけるために予備的な検討を行なってみた。その際、この資料と比較する資料が必要である。それには、二つの条件が必要である。一つは実際に実物を入手し検討されていること。もう一つは、ある市場で徹底的に収集され、そのすべてにわたって検討されていることである。

この二つの条件をだいたい満たしているものが二つある。薬材学と、Gardens' Bulletin 第6巻の報告である。

薬材学は、南京薬学院薬材学教研組によって、1959年に編集され、1961年に出版されたものである。植物性生薬498種、動物性82種、鉱物性54種、合計634種が記載されており、さらに付注に160種余りが加えられている。

この編集のために、南京を中心とした地方で、中薬房、中薬廠、中薬公司以て実地調査を行なっている。そして北京、天津、沈陽、成都、上海、苏州、杭州、永嘉などでも標本を収集し、その生産や鑑別のための資料を集めている。そして記載にあたっては、常に実物にあたってい

る。これらの中には、わずかに洋地黄や洋金花、番瀉叶などの西薬も加えられている。ここでは、これらも中薬としてとりあつかっている。*

Gardens' Bulletin 第6巻に、David Hooper による「On Chinese Medicine: Drugs of Chinese Pharmacies in Malaya」という報告がある。これは1929年に発表されたものである。

この報告のもとになった生薬は、当時、シンガポールの Botanic Garden の Director であった I. H. Burkill がマラヤの中薬薬行で収集したものである。収集地の明確な記述はなく、恐らくは、大部分をシンガポールで集めたものであろう。これには、植物性生薬415種、動物性29種、鉱物性12種合計456種が記載されている。植物性生薬は、Kew の Royal Botanic Gardens で同定された。その精度は相当に高いものである。ただし、動物類や鉱物類は慣用名で記載されており、植物性生薬よりは、精度が低いようである。

この二つの資料を用いて、本稿では、全体像を把握するために、主に数量的な比較を行なう。

(1) 比較するための手続き

シンガポールの中薬と Gardens' Bulletin 記載の中薬と薬材学記載の中薬のそれぞれを対応づける基準、すなわち一致する、一致しないという基準が必要である。この基準のとり方は意外に難しく、原則として次のようにして行なった。

まず、飲片と生のものといった形状の変化したもの、加工法の異なるもの、等級や使用部分の異なるものなどは、本稿では区別して記載してきた。しかし薬材学ではそれらを区別せず、1品目としてとりあつかっている。そこでまず、薬材学にしたがって、そのうちの代表的な品目に整理した。そのため、シンガポールの中薬として記載した621点は581点に整理された。Gardens' Bulletin についても同様に処理し、456点は430点に整理された。

つぎに生薬名の検討が必要である。生薬名自体がさまざまに変化する。たとえば、夜勾藤(夜交藤)、毛根(茅根)、白朮皮(白鮮皮)、川花朴(天花粉)、北子苑(紫苑)、川一金(郁金)、

* ここで筆者らの「中薬」と称している内容を述べておきたい。

中薬を筆者らは非常に広く解釈している。「中薬とは、中国医学体系ないしは亜流中国医学体系の中で用いられる薬物」という意味で用いている。亜流という言葉はやや不明瞭であるが、これは主に中国の民間医学のようなものをさしている。

このような一義的な意味のほかに、動的な概念をさらに加えている。その薬物が、発生的には、他の医学体系からのものであっても、その体系の中にとりこまれてしまった薬物は、中薬とみとめるという見方である。ある薬物をすでにとりこまれてしまったかどうかの判断はややむずかしい。だが、その薬物がもとの医学体系とはことなった用い方や考え方で用いられるようになったときに判断基準の一つである。たとえば、洋地黄や洋金花、番瀉叶などは、他の中薬とまったく同様に記載されており、番瀉叶の場合、その用途として「性寒、苦甘苦」などと記されている。これはすでにヨーロッパ流の解釈ではない。すでに中国医学の体系にくみこまれていると判断できる。それゆえ、ここでは、薬材学記載のすべての生薬を中薬としてあつかっている。また、この視点はさほどに奇妙なものではない。現存する中薬自体が、さまざまな薬物を取りこんできた歴史的産物にすぎないからである。

このような中薬観に立つと、中薬の範囲をこれまでより広げてとりあつかえるし、一方では中薬の変動の問題をとりあつかえるようになる。

鸡旦花（鸡蛋花），凌霄花（凌霄花），旋福花（旋复花）など同音異字と解釈できるものが非常に多くある。中国人は漢字を大切にするというのはどうやら俗説で，中薬薬行で実際につかっている生薬名は，漢字にそれほど気をつけているようにはみえない。音が共通であれば充分なのである。また，筆者らの読みちがいでではなくまれに碎骨補（骨碎補），五脂灵（五灵脂），石蕊花（花蕊石）のように字の逆転するものもみられた。（ ）内は薬材学での名称であるが，現物との対応を行ないながら，それらと同一名であることを確認した。

実際に収集した生薬と記載された生薬の性状とを比較して，全く同一またはほぼ類似しているにもかかわらず生薬名の全く異なるものがある。それらは多くの場合，シンガポールの中薬と，G. B. の中薬の間でおこった。薬材学との間にそのようなことがあまりおこらないのは薬材学では別名を相当よくひろっており，多くはそのどれかに該当するからである。蒲黄头（和尚頭），芙蓉根（川樺皮），香泽芝（澤蘭），水綿花（伏雙花），夏枯（洛吟草），益母花（坤草），老孝花（肉豆蔻衣），江子仁（巴豆子），千金子（續随子），生意仁（士熱米），金笑梅（錦地蘿）など，——（ ）内は G. B. 記載の生薬名—— がその例の一部であるが，これらは別名としてとりあつかった。

一方，生薬名が同じかあるいは類似しているにもかかわらず，その基原植物がことなることがある。その場合，同一生薬名であるということは，同様の用途であること示唆していると考え，ここでは同類生薬として取りあつかった。

同一生薬名に対して基原植物が異なる生薬は生薬学的に興味のある問題であり，なお研究の余地がある。

種のレベルで異なるものは多いが，ここでは省略しておく（すでに報告した表を参照していただきたい）。

属のレベルで異なるものには次のようなものがあつた（S: シンガポール，G. B.: Gardens' Bulletin, Y: 薬材学）

- （川芎：Ligusticum wallichii Franch (S, Y)
- （川芎：Peucedanum japonicum Thumb. (G. B.)
- （莪朮：Curcuma zedoaria Roscoe (S, Y)
- （莪朮：Kaempfeia pandurata Roxb. (G. B.)
- （鶴虱子：Daucus carota L. (S)
- （北鶴虱： " (Y)
- （孚虱：Caucalis Anthriscus Scop. (G. B.)
- （汗防己：Stephania tetrandra S. Moore (S)

防己：Stephania tetrandra S. Moore (Y)

防己：Cocculus trilobus DC (G. B.)

木防己： " (Y)

刘寄奴：Artemisia anomala S. Moore (S, Y)

寄奴：Solidago virga-aurea L. (G. B.)

科のレベルで異なるものには次のようなものがある。

降香：Acronychia pedunculata Mig (Rutac.) (Y)

降香：Darbergia sp. (Leguminosae) (G. B.)

关沙苑：Astragalus camplanatus R. Br. (Leguminosae) (S)

関沙苑：Abutilon indicum G. Don (Malvac.) (G. B.)

鸡骨香：Croton crassifolius Geisel (Euphorbiac.) (S)

鷄骨香：Aquilaria sp. (Thymelaeac.) (G. B.)

棗仁：Zizyphus spinosus Hu. (Rhamunac.) (S)

沙棗仁：Diospyros Lotus L. (Ebenac.) (G. B.)

大青葉：Isatis tinctoria L. (Cruciferae) (S)

大青：Indigofera tinctoria L. (Leguminosae) (G. B.)

金耳環：Asarum sp. (Aristolochiac.) (S)

金耳還：Lycopodium serratum Thumb. (Lycopodiaceae) (G. B.)

千年健：Homalomena sagittataefolia Jungh. (Arac.) (S)

千年見：Polypodium sp. (Polypodiaceae) (G. B.)

鳥不企：Aralia decaisneana Hance (Arac.) (S)

鳥不宿：Zanthoxylum sp. (Rutac.) (G. B.)

銀柴胡：Stellaria dichotoma L. var. lanceolata Bunge (Caryophyllac.) (S)

銀紫胡：Bupleurum falcatum L. (Umbelliferae) (G. B.)

西紅花：Crocus sativus L. (Iridac.) (S)

西紅花：Carthamus tinctorius L. (Compositae) (G. B.)

千里光：Lespedeza cuneata G. Don. (Leguminosae) (S)

千里香：Daphne odora Thumb. (Thymelaeac.) (G. B.)

なお、上記したものがすべてではなく、また種々の問題を含んだものもある。たとえば、甜老葉(S)は基原が不明であるが、甜薯(G. B.)とは対応するものとして処理した。一条根(S, G. B.)はともに基原不明であるが同類生薬とした。

(2) 全体としての比較

先述したような手続きで、表1を作成した。この表をもとにして、全体での比較を図1に示した。

薬材学や Gardens' Bulletin 記載の中薬のすべておよび、筆者らが収集した中薬のすべてで、それぞれの市場のすべての中薬を落ちこぼれなくひろったわけではあるまいが、これら三つの中薬群はその調査法から推断して、それぞれの市場を十分に表現していると考えてもさしつかえあるまい。

シンガポールの中薬群(S)と薬材学記載の中薬群(Y)との比較は、シンガポール市場の中薬群と、南京を中心とした市場の中薬群の比較を意味する。そして、適切であるかどうかは今とはわかないことにして、東南アジアの中薬群と、中国本土の中薬群の比較ということを念頭においている。

さて、図1からみると、シンガポールの中薬群と薬材学記載の中薬群とに共通な生薬は、前者の70%をしめ、後者の60%をしめている。このことは、二つの評価の仕方がある。一つは、やはり両者の間には、高い相似性があるという見方、もう一つは同じ中薬でありながら、約3分の1ほどもの生薬がことなっているという見方である。もちろん筆者らは後者の立場をとっ

表1 シンガポール, Gardens' Bulletin, 薬材学の中薬群の比較

	生薬総数				3者共通 SGY	互いに2者共通の生薬				互いに非共通の生薬			
	S	G	Y	(S+G)		SG	GY	YS (S+G)	Y	S	G	Y	(S+G)
茎	49	32	34	58	17	23	19	28	30	15	7	4	28
皮	18	18	21	21	14	15	14	15	15	2	3	6	6
根	47	42	54	57	29	32	34	44	49	1	7	9	11
根	106	73	98	120	41	59	46	69	74	19	8	24	45
葉	23	16	27	28	9	11	10	13	14	8	5	13	15
花	33	33	39	39	21	27	21	23	23	4	5	16	15
果	87	73	104	96	53	64	56	71	74	5	6	30	22
種子	50	47	65	58	34	39	37	43	46	2	4	19	11
全草	77	43	53	86	12	34	12	17	17	38	7	35	67
その他	26	23	42	34	13	15	18	21	26	3	4	16	9
動物	46	18	82	47	15	17	16	38	39	6	0	43	8
石	19	12	54	26	5	5	9	19	23	0	3	31	3
合計	581	430	673	670	263	341	292	401	430	103	59	246	240

(注) S: シンガポールの中薬 (以下の図においても略号は同様)
 G: Gardens' Bulletin 記載の中薬
 Y: 薬材学記載の中薬
 SM: S と M に共通の中薬
 (S+M): S と M を合わせたもの

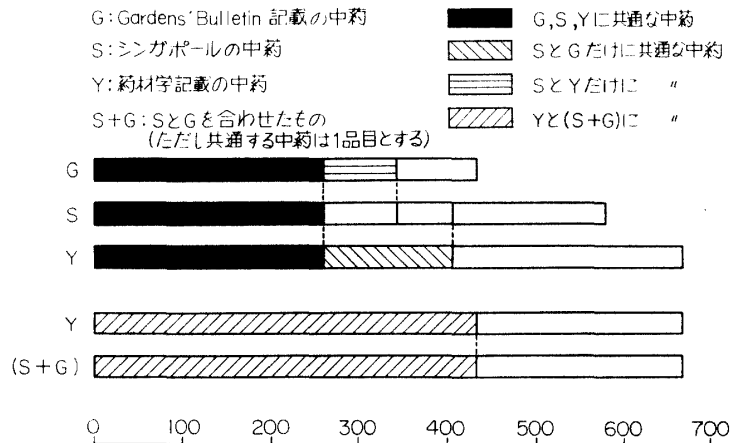


図1 中薬群全体の比較

ている。

シンガポールの中薬群と、Gardens' Bulletin 記載の中薬群 (G) との比較は、ほぼ同一市場における40年間の時間の流れによる変動を表現している。40年の間に、150点もの生薬が加えられ、市場での種類が豊富になった。そして、後者の80%がなお現在の市場にみられる。そこには、市場のある程度の連続性がやはり読みとれる。しかし、現在の市場では、増加したため60%ほどが40年前のものと共通であるにすぎず、相当にはげしい変化をとげたと考えられる。

また、三者に共通な生薬は、薬材学記載の中薬のたったの40%にすぎない。時間、場所をとわないで常に使用されている中薬の中核となるものは意外にすくないものなのかもしれない。やはりさまざまな条件の中で変動しているのであろう。

東南アジアの中薬群と中国本土の中薬群の比較をより鮮明にするために、40年前の中薬群を現在のものに加えたもの (S+G) と、薬材学の中薬群と比較してみた。総数ではほぼ同数の670ほどになり、互いにほぼ3分の1ずつ異なった生薬をかかえている。東南アジアの中薬群と、中国本土の中薬群とは、まずまず3分の2が同様のものとみていいようである。もちろんこれらの試みは粗いものであるが、このような試みがほとんどなされていない現在では、一応の目安となるであろう。今後の資料のつみあげによってより明確にしてゆきたいと考えている。

(3) 用部別にみた比較

この項は、はじめから予測して行なったものではない。このシリーズでは薬材学の記載法にしたがって用部別に記載した。そのため、全体をまとめる過程で出てきたものである。

しかし、生薬が茎であるとか根であるとかといった形態が、薬としての生薬にどれほどの意味があるのかは、やや検討するには難しい問題である。ここでは、それにはあまりふれずに試みた。

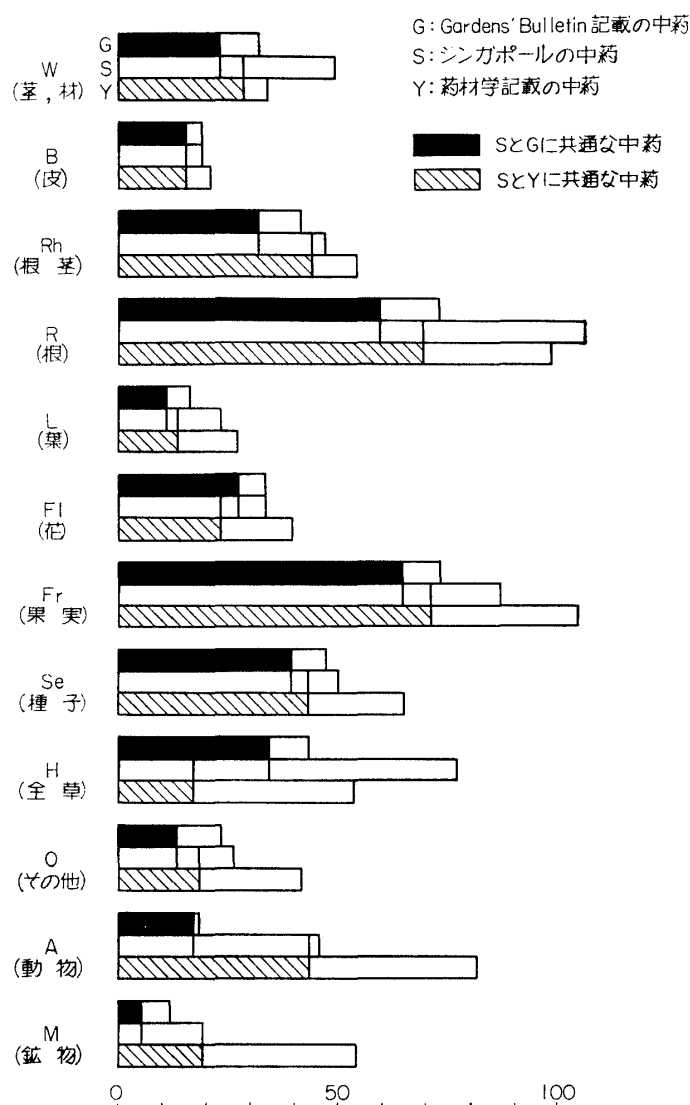


図2 各用部における比較

用部別の三者の比較を図2に示した。さらに、類型化するために、図3のようなグラフをえがいた。

これらのグラフは同一の手続きで行なっている。(i)のシンガポールの用部別の中薬群と薬材学記載の用部別の中薬群の比較で説明すると、横軸には、共通する生薬に対するシンガポールの中薬の割合(SY/S)をとり、縦軸には、それに対する薬材学の中薬の割合(SY/Y)をとった。そのため、0点に近いほど両者は異なったものであり、(1.1)点に近づくほどに一致度が高くなる。また、0点と(1.1)点を結ぶ対角線よりも左上方に点がくる場合、シンガポールの中薬のほうが薬材学の中薬よりも全体の数が大きいことを示し、右下方にある場合は、その逆になる。各点を環でくくっているが、その意味を考慮しながら、できるだけ自然なくくり方を

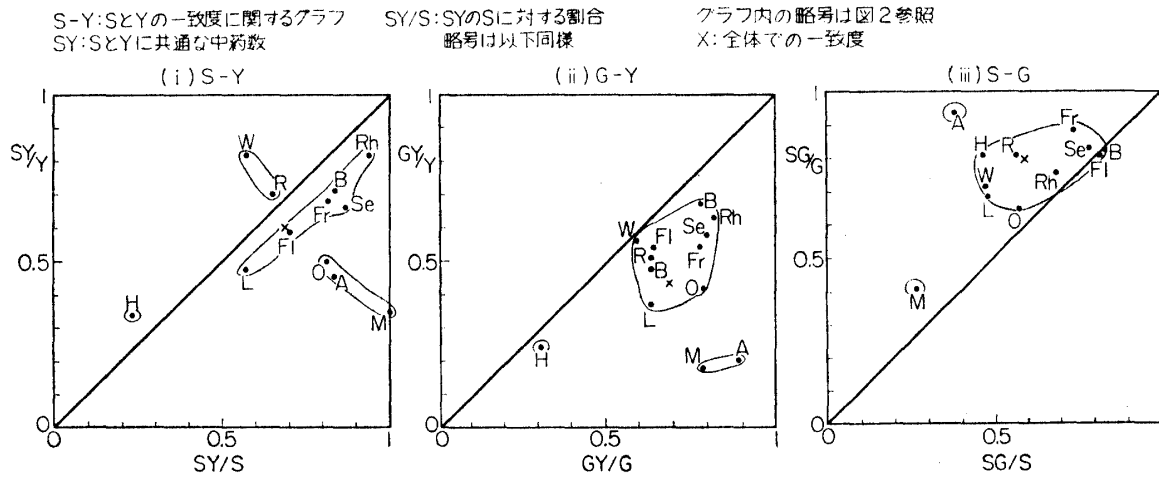


図3 用部別の比率での比較

したつもりである。

図2を参考にしながら、(i)のグラフを考察してゆくと、まず全草類(H)が目につく。対角線の上方にあり、かつとびぬけてはなれており、一致度が極めて低い。次に鉱物類(M)、動物類(A)、その他類(O)のグループは、対角線から下方に大きくはずれているとともに、横軸の1に非常に近い。すなわち、このグループは、ほとんどのものが薬材学の生薬に一致するが、薬材学にとってはそれは一部分でしかない。次に、対角線より上方に位置する茎、材類(W)と根類(R)からなるグループがある。これらはともにシンガポールのほうが数量的に多く、比較的薬材学では一致度が高く、シンガポールではそれほど高くはない。すなわち、これらは鉱物類などのグループのほぼ対蹠的なグループである。残る一群は、対角線の近くに、対角線にそってならば、葉類(L)、花類(FI)、果実類(Fr)、種子類(Se)、皮類(B)、根茎類(Rh)のグループである。一致度は、その順に高まってゆく。このグループが全体としての両者の一致度を表現している。

同様のことが、Gardens' Bulletinの中薬と薬材学の中薬との間にもみられる。全草類は同様に極端に一致度が低く、その他類を除いた動物類、鉱物類が一つのグループをつくり、薬材学の一部からなりたっている。茎、材類、根類は、(i)のように一つのグループを形成せず、その他類をも包含して一つのグループを形成している。

シンガポールの中薬とGardens' Bulletinの中薬との比較では、相当に様子が異なる。鉱物類と動物類が目立ってはなれており、他のものは一つのグループを形成している。鉱物類は、ともに収集された数が少なく、わずかの相違が大きく影響をおよぼし、このようなとびはなれた位置にある。動物類は、Gardens' Bulletinではわずかであり、かつそれらは、ほとんどシ

ンガポールの中薬と同様のものである。このやや特殊で数の少ない、生薬をのぞくと、ほぼ近似の位置に集中している。

このようなことから、シンガポールの中薬群と *Gardens' Bulletin* の中薬群とは 薬材学の中薬群よりも近いものであるといえる。また、薬材学の中薬群がこれらの中薬群ともっとも異なるのは、全草類であることが指摘できる。

別の視点からみると、その変化する用部は、全草類、葉類、茎・材類および根類である場合が多い。これは葉類生薬の品質的に劣るものが全草類生薬にいれられ、また茎・材類生薬と根類生薬とは明確に区別することができないことにも関連している。

また、全草類、葉類などの一致度の高さは、全体としての中薬群の一致度の高さと比例関係にあるかもしれない。さらにこれまでの数度の民間薬調査の経験では、民間薬の普通の形態は全草が最も多く、ついで葉、茎、根であったことを考えると、民間薬がまじりこんでいる可能性が高いと思われる。

本稿では、主に数量的な観点から分析したが、次稿ではさらに進めてその中味の、あるいは質的な考察を行なう予定である。

<謝 辞>

本調査にあたり種々便宜をはかって下さった京都大学前薬学部長上尾庄次郎教授、シンガポール大学 Dr. H. Keng, 日本薬学会、大阪市隆泰貿易株式会社鄭岳氏ならびに呉健行氏、シンガポール益興貿易公司李懷徳氏ならびに黄徳祥薬行その他の方々へ感謝いたします。あわせて出国に際し、御便宜をはかって下さった京都大学薬学部木島正夫教授ならびに宇野豊三現薬学部長に感謝の意を表します。さらに鉱物性生薬の同定に際し、種々御指導いただいた本学薬学部中垣正幸教授、大崎健次教授ならびに真崎規夫助教授に深謝いたします。

<参 考 文 献>

- 南京薬学院薬材学教研組編:『薬材学』(1961)
- 中国医学院薬物研究所等編:『中薬志』Vol. IV (1960)
- D. Hooper: *The Gardens' Bulletin*, Vol. VI (1929-30)
- G. A. Stuart: *Chinese Materia Medica*, (1911)
- F. P. Smith: *Materia Medica and Natural History of China*, (1871)
- 桐山:『構造無機化学 III』(昭29)
- 須藤:『粘土鉱物』(1953)
- American Society for Testing and Materials: *X Ray Powder Data File Inorganic Set 1-5* (1960), 6-10 (1967)
- 木村, 木島, 丹:『和漢薬名彙』(昭21)
- 益富寿之助:『学位論文集』(1958)
- 内田ほか:『日本動物図鑑』(1949)